

# 植民暴力の記憶と日本人の責任

— 台湾先住民族タイヤルと脱植民化運動の広がり —

中村 平\*  
husv83@gmail.com

## <要 旨>

중화민국이라는 국민국가의 인구 2%를 차지하는 타이완 선주민족(정부로부터 인정받은 민족은 14개)은 현재 민족자치의 실현을 모색하고 있다. 지난 백 년간 일본제국과 중화민국의 식민정책 아래서 민족 자치의 권리를 박탈당해 온 선주민족의 지식인들에게 민족자치와 탈식민화는 불가분의 개념이다. 타이완 선주민족 중 하나인 타이알의 민족의화와 타이알 민족적(民族籍)을 지닌 타이완 국회의원 가오진수메이(高金素梅)에 의해 현재 타이알의 민족사가 추구되고 있다. 식민화된 자신들의 역사를 주류 사회에 알림으로서 타이알 문화에 대한 존중을 확보하면서, 국유화되었던 토지 반환 소송도 벌이고 있다. 타이알 민족사에 대한 그들의 연구는 민족사의 배경에 잠재되어 있던 수많은 폭력의 기억들을 불러내는 일이기도 하다.

현재 타이알 민족의회 의장으로 있는 마사 토푸이씨(1932년생)의 아버지, 하라토타로(原藤太郎)는 1939년 토지문제를 둘러싸고 식민지 정부에 항의하기 위해서 합복자살을 했으며, 국회의원 가오진수메이는 1913년 일본인이 타이알인을 처형하기 직전의 장면을 찍은 사진을 본 후 타이알인으로서의 자신의 아이덴티티를 자각하게 되었다고 말한다. 또 연구자가 현지조사에서 만났던 타이알의 고령자 남성 우마오씨의 이야기의 배후에는 1910년 가오강 지역에서 수많은 사상자를 낸 타이알과 일본의 정면충돌이라는 폭력의 경험이 존재한다.

타이알에 대한 일본 식민통치의 책임을 지는 주체는 개개의 기억을 들으면서 ‘분유(分有)’된 기억으로 연결되는 ‘우리들’이다. 기억의 분유란 역사의 공유(共有)에 대치되는 개념으로서, 단편적인 기억이 단편적이고 불완전한 채로 사람들에게 전파되고 서로 나누어 가지게 되는 것을 말한다. 분유의 중요한 계기는 ‘타이알이란’ ‘일본이란’ 무엇인가 라고 묻는 물음에 있다. 연구자에게는 일본의 식민통치에 대해 책임을 진다는 것이, 대만선주민족의 목소리를 듣는 가운데 연구자에게 분유된 폭력의 기억을 민족지적 스타일로 풀어내고, 그것이 여러 사람들에게 분유되어 새로운 대화의 장이 열려 식민통치와 그 후 일본의 태도가 만들어낸 상처를 치유하는 것을 의미한다. 전쟁을 경험한 일본인 전쟁세대의 단체인 아케보노회(曙会)는 타이완 선주민족의 다카사고(高砂) 전 의용대원(義勇隊員)들을 황족에게 알현시키거나, 금술잔으로 전쟁의 노고를 치하하는 활동을 통해서 다카사고 의용대원들은 치유 받는 것처럼 보이기도 한다. 그러나 아케보노회의 회원들이 자신들의 폭력의 기억에 대해서는 전혀 문제삼지 않는 방식으로 과거 일본제국의 문화장치를 재생산하고 있는 이와 같은 현실은 일본인의 탈식민화와 탈제국화의 어려움이 무엇인지를 여실히 드러낸다.

트라우마적인 경험을 포함한 타이완 선주민족의 역사와 개개인의 기억을 듣고 쓰는 연구자가 일본인이라는 사실은 이 인류학적 민족지가 일본인의 이야기로서도 기술된다는 것을 의미한다. 일본 식민통치의 극복이 타이완 선주민족에게는 탈식민화라는 하나의 초점이지만 패전이래 일본이 식민지를 외면하고 망각해온 문제를 포함해서, 일본인은 무엇을 해왔는가를 묻는 ‘우리들’의 구명(究明) 또한 타이완 선주민족의 자치운동과 겹쳐지는 형태로 진행된다. 식민통치에 대한 책임을 지는 출발점은 무엇보다 우선 식민통치가 초래한 폭력의 기억을 일본인들이 분유하는 것이 되어야 하며, 그것은 타이완 선주민족의 탈식민화와 자치추진 운동과 직결된 문제이기도 하다.

主題語 : 植民、暴力、記憶、責任、台灣先住民族

\* 漢陽大学校 国際文化大学 日本語文化学科 講師

## 1. 植民暴力の記憶と語り、日本植民地・台湾に関わって

本稿は、日本国籍を持つ私が台湾で見聞きした植民の暴力の記憶と語りを、台湾先住民族タイヤルと日本人の新しい関係の構築を目指して記述する。それは、日本人がいかに植民統治の過去の束縛から脱することができるかという、日本人にとっての脱植民化（decolonization）の課題を、台湾先住民族の脱植民化と共に推し進めようとする努力の一環である。

本稿は具体的に、「自分たち」とは何者かを確定しようとするタイヤル民族議会やタイヤル民族籍国会議員による民族自治と民族の歴史の模索の動き、フィールドワークで出会った台湾先住民族の語り、漢民族研究者により聞き書きされたタイヤル高齢女性の語りを取り上げ、その背後に潜在する暴力の経験をそれらが癒されることを目指して描き出す。そこに日本の戦中派団体「あけぼの会」の、当時から引き継ぐ「大東亜」の夢が干渉し絡まりあっており、日本とタイヤル双方の脱植民化が苦境にあることを明らかにする。その苦境は、植民側が被植民側の自治運動の背後にあるもの——暴力の記憶——が感知される中で打破されていく。暴力の記憶は被植民者の日常生活の中に意図せずとも到来してくるものであり、それを見聞きするものが意図せざる形でしてしまう「感知」を、本稿で「分有」（後述）と考えている。

「自分たち」とは何かを確定しようとする動きと、トラウマ的記憶は切り離せない。台湾先住民族という「自分たち」は植民的暴力の只中で形作られてきたためであり、「自分たち」の内容を確定しようとする際に、暴力によるトラウマの記憶が呼び起こされてしまうからである<sup>1)</sup>。タイヤルと日本、中国の暴力の経験そしてそれらの歴史と文化を扱う本稿において、暴力の記憶の到来が開く新しい「私たち」の追究は、日本の植民統治責任と戦争・戦後責任の取り方と関わるものである。

春日直樹(2006)は人類学的民族誌（ethnography）記述のあり方について、部分が、想定しきれなかった全く別の何かの部分である可能性を開いていくような記述があるとしている。本稿における個々の暴力の記憶はこの「部分」に相当し、民族史が個々の出来事という部分をナショナルな民族主体の「全体」に配置しようとする力を突き破ったりずらしたりしながら、別のつながりを換喩的に生み出すだろう（磯田 2006）。本稿はこれらの議論の土台に乗りつつ、ナショナルな主体（subject）が立ち上がりつつもそれが常にずれていく形で、植民と戦争の応答責任（responsibility）を共に取っていく「私たち」という主語（subject）を現前させようと試みる。

台湾先住民族が自らを権利主体として称する際、民族の抑圧された歴史が登場してくる。日本植民地政府（1895—1945年）と第二次大戦後の中華民国政府による、暴力を背景とした鎮圧と同化の歴史が想起されるのである。先住民族の主体は、かれらの歴史と共に立ち上げられようとしていると言ってよい。その歴史には民族＝国民主義（ナショナリズム）の力が働き、民族を均質な歴史と文化を持った存在としがちであるが、その背景にはそれを主張する人々の暴力を含めた様々な記憶が潜在している。抑圧されてきたという歴史と共に立ち上げられる民族主体と同時

1) 近年のトラウマ研究は、個人のトラウマ記憶と同時に、集団や民族・国民のトラウマ経験を対象としている。トラウマの輪郭化と克服にあたり、言語の果たす役割が積極的に注目されている（カルース 2000；下河辺 2006；宮地 2007を参照）。

に、そうした暴力を含んだ様々な記憶が、それを語る場に現前している。それらの暴力が聞かれ、読まれる場においてこそ、ナショナルなものに基盤を持たない「私たち」が登場する可能性がある。暴力の歴史を遡ることによって自分たちが何者であるかを確定しようとする中で、これまで「族」や「民族」として分節されてきた自他の線分が再考される（引き直される）可能性が生じよう。植民統治責任は、暴力の歴史と記憶が聞き、書かれ、それが読まれる「接触領域」(contact zone)としての場に設定しうる（中村 2007）。

台湾北部高地の先住民族タイヤルの集落において、私が聞き書いた話から始めたい。2008年5月現在、台湾先住民族（中国語で〈<sup>ユンチン・ミンズー</sup>原住民族〉）は中華民国政府に14民族が公認されており、タイヤルは人口7－8万人ほどの民族である。首都台北から車で3－4時間ほどの北部山地・エヘン集落に住むウマオ氏は60代後半で、終戦時に5、6歳だった。子どものころに聞き覚えた日本語と、中国語を交えながら、日本の植民統治時代をこう振り返る。

「あの頃自分たちは、（日本人の）話をよく聞いた（話に従った）な。朝、鐘が8時に鳴って仕事を始める。お昼に休んで、5時に仕事から上がるんだ」。ウマオ氏の話を私はどう聞けばよいのか、戸惑いながらも耳を傾ける。私は大学卒業後、日本の植民地教育の台湾の人々への影響について考えようと1996年に台湾に渡っていた。その時持っていた問題意識の一つは、「日本人として」アジアの人々に対する植民統治責任・戦争責任を引き受けなければならないというものであった。

しかし台湾に数年間滞在し、いろいろな方のお話を伺う中で、知り合いの方の特に暴力に関する話を聞く状況において、聞き手である私の「日本人」という属性が常に前面に出ている（前景化される）訳でもないと考えるようになった。私は暴力に関する話を、常に「日本人として」聞くことはできない。日常的な生活のコンテキストにおいては、私は自分を日本人と常に意識して話を聞いている訳でもなく、意図せずして暴力を語る記憶（あるいは暴力の記憶が語られる場）に不意に出会ってしまうことがある。本稿は私にとっての「日本人の責任」を、「日本人」というナショナルな主体を立ち上げてから取るのではなく、暴力の記憶に不意に出会ってしまう地点（場面）に差し戻して思考する。

ウマオ氏の話は、日本による植民統治をよかったとも悪かったとも言わない。ウマオ氏の祖父の世代には、1910年に起こった日本との「戦争」（いわゆる日本側の言う「ガオガン蕃討伐」）で亡くなった方がいる（中村 2003a）。直接そのことを想起していなくても、ウマオ氏の日本時代への評価には単純な言い切りを許さない何かがある。ウマオ氏の父はエヘン集落初代の「頭目」が退いた後の自助会「会長」職を務めた人物で、日本人との関係は良好だったようだ。頭目と会長は共に、台湾先住民族統治のために日本人が設置した制度である（中村 2003b）。

私はウマオ氏の述懐の意味を、こう理解する。1910年に起こった、エヘン集落を含む「ガオガン蕃」の「鎮圧平定」とそれに引き続いて展開される植民政策、更には第二次大戦への動員という過程の中で、エヘンのタイヤルたちは日本統治の終了する1945年まで、日本人の命令を聞かない訳にはいかない（植民地）体制の中に組み込まれていた。日本との戦争によって受けた

祖父の世代の傷、そしてその後の植民統治という「近代化」の展開、日本が去った後にも続いた国家統治の暴力の経験が、ウマオ氏の話の裏について回っているのである。ウマオ氏の話す「自分たち」は、植民的暴力の下での近代化と、その過程の中で主体化してきた「私たち」、つまり「タイヤル民族」という問題に関わっている。これらの歴史と記憶について、以下に詳述しよう。そして、そうしたトラウマ的な過去が想起されていることを私が感知する中で、私とウマオ氏をかすかにつなぐ暴力の記憶の「分有」が行われる。その感知は、そのような民族誌的記述(ethnographic writing)に触れた読者のものでもある。本稿を通して、日本の植民統治責任が、暴力の記憶の分有が生み出す「私たち」により取られていくものであることが理解されよう。

## 2. 「私たち」を自称する自治運動と脱植民化運動

日常生活の聞き書きの中でなされたウマオ氏の話は、他人の命令に従うことのない「自分たち」を構想する台湾先住民族の自治運動との関連の中で解釈されるべきだろう。台湾先住民族の多くの知識人にとり、自治運動は脱植民化(decolonization)という概念と共に思考・模索されてきた(中村 2007)。台湾の人口の2パーセント未満を占める台湾先住民族は、「大日本帝国」の植民地において「蕃人」「蕃族」のちに「高砂族」と名指され、「進化」の度合いを理由に、一般行政区域とは異なった「特別行政区域」を中心に居住区を制限された(ただしアミ等を除く)(小林 2001)。日本の敗戦後、中華民国により台湾が接收され、台湾先住民族は「中華民族」・「中国人」として同化政策を蒙り、「山地の同胞」と呼ばれた<sup>2)</sup>。漢民族中心の台湾の民衆社会においても先住民族に対し差別的な表現が存在し、区別と差別を受けてきた。

台湾先住民族は、近代国家によるこのような武力統合とその後の同化政策に、唯々諾々と従ってきた訳ではない。「理蕃五箇年計画」の日本との「戦争」(1910-14年)に始まり、帝国議會を揺るがした1930年の霧社事件など、反乱はたびたび発生した(傅 2006)。第二次大戦後においては、民衆と中華民国政府の衝突に発展した1947年の二・二八事件以降、1950年代、60年代と白色テロと呼ばれる国家テロリズムの時代を経てきた(徐(編) 2004)。この中で、タイヤルやツォウの民族エリートには「国家転覆」を図る共産主義者という罪名を着せられて殺された者もあり、その名誉回復は1990年代まで待たなければならなかった。

以上のような暴力とテロリズムの中をぐり抜け、1980年代から台湾先住民族は自分たちが他人から名付けられる存在ではなく、自分たちは自分たち自身以外の何者でもないとして運動を強く展開していった。自称を中国語で「<sup>ユンヂェンミンズー</sup>原住民族」とし、1990年代からの一連の憲法改正と独立した行政機関の設置を勝ちとり、国有化された民族本来の土地の返還運動を起こした(石垣 2007；

2) 「同胞」が中華民族統合の擬制親族的イデオロギーであり、それに対して台湾先住民族が自己を自称する行動と主張を行った際の台湾の人類学界をめぐる動きについては、丘(1997a)、Chiu(1994; 2000)を参照(両者は同一人物)。植民政権の崩壊と民族エリートによる政權代替が脱植民化を必ずしも意味しない点、並びに「コロニアルなものを破る言説」(中国語は「破殖民論詰」)の重要性については丘(1997b)を参照。

笠原 2004；若林 2007)。2005年には先住民族基本法が公布され、現在「先住民族自治区法」草案が議論されている<sup>3)</sup>。

こうした武力を含む抵抗や顕在化した運動における(民族)主体性と同時に看過し得ないのは、為政者の近代化政策に一定程度賛同し(あるいは賛同させられ)つつそれを推進しようとする(民族)主体性であり、その背後に抑圧されている暴力の経験の記憶である。冒頭のウマオ氏の「あの頃は日本人の話をよく聞いた」という語りがここに重なる。次節で見るように台湾先住民族の主体は、抑圧されてきたという自分たちの歴史を言語化しつつ、その歴史を伴いながら立ち上がっている。そのすぐ隣に、明確に言語化されない暴力の記憶が潜在している。その歴史を共有しつつ、植民的暴力の記憶を聞き書き、その民族誌的記述が読まれる中で、新たに生成する「私たち」により暴力の記憶が分有される事態が生じる。

ここで言う「分有」とは、歴史の「共有」などと言う際に歴史や人々、民族を自己同一的な固定した存在とみなし、それが均質に共有されるイメージなのではない。歴史や人々、民族が明確に定義できる外縁を持つのではなく、誰と誰が何を共有するという事態が不可算名詞(酒井 1997)の間の出来事であるようなイメージである。暴力の記憶や体験が、完全に理解されえないが何故か分かったり、知覚してしまうといった、人間の側が受動性をはらむような事態を想定している(岡 2000)。

タイヤル民族議会の立ち上げる歴史を見る前に、民主化運動の中の1988年になされた「台湾先住民族権利促進会」による「台湾先住民族権利宣言」について触れておこう(謝 1987を参照)。主体は自称するところに成立することが、第11項「先住民は、誰が先住民であるかを決定する権利を有する」に端的に表明されている。2007年9月に採択された「先住民族の権利に関する国連宣言」においても、「先住民族は自決の権利を有する」(第3条)と謳われており(『先住民族の10年News』139号の特集を参照)、自決には「自分たち」が何者であるかを決定する権利が含まれると考えられよう。

### 3. タイヤル民族の歴史と暴力の記憶群

#### 3.1 タイヤル民族議会による民族自治の希求と、植民化されてきたという民族史の登場

民族自治希求の主張において、植民された過去が民族的(ナショナル)なものとして登場している。それは民族主体という均質な「私たち」を想像する意味で、極めてナショナルなものである。2005年6月11日にタイヤル民族議会が発行した、『タイヤル民族議会第二期第一回大会パンフレット』において表明されるタイヤルの歴史を見よう。タイヤル民族議会は、誰がそしてどんな組織がタイヤル民族を代表し得るのかという課題を抱えつつ、キリスト教長老教会のメンバーが中

3) 本稿では以上のような特異な歴史的経緯をもって成立した「原住民族」という中国語を、日本語の「原住民」の与える語感を鑑み「先住民族」と翻訳している。



心となり2000年12月に設立した。中華民国の法体系には未だ組み込まれていない、自発的組織である。タイヤルの古国を復活させようという「タイヤル古国復活論」「独立主権の“タイヤル国”」が、抑圧されてきた民族の歴史の中で展開される。

\*

「タイヤル民族は約五千から六千年前に、先住民族の中でも最も早く台湾に到達し、(中略)タイヤル社会は完全な社会制度を持っており、近隣の異族との間に国境を引き、争いがあれば国を挙げて国を守っていた。古國中興の祖にはモウダなどがおり、山を越え土地を求め境界を定めた」。「1624年台湾島は、外来政權の植民統治を受け始めた。まずaオランダ(1624-1662)、bスペイン(1626-1641)、c明の鄭氏(1662-1684)、d清朝(1684-1895)、e日本統治(1895-1945)であり、これらの植民者は、時を経過すること前後して321年である。そのうち前者三代はタイヤル国を侵犯することはなく、お互いの間には正常な関係を保持していた。後の二代の植民者、清朝と日本の侵犯は、以下の通りである」。

\*

清の劉銘伝(台湾巡撫)はタイヤルに対し軍隊を動員し掃討を行ったが、その目的は達せられなかった。日本統治期の「タイヤル国」は、「番人と番地により規定された。その五十年間の統治において国法が使用されることはなく、先住民行政は植民自治の方式により治められた。日本人は、タイヤル人が番地を彼ら自分たちの国土と見做すことを承認していた」とする。パンフレットの最後は、最大課題である土地に関する「タイヤル民族土地宣言」が表明されている(北京語の翻訳から訳出)。

\*

日本政府に侵奪されていた固有の領土は「サンフランシスコ平和条約」成立後、即刻元の主人(タイヤル民族)に返還されるべきである。現中華民国政府はタイヤルの領土を侵奪し、植民と侵略を行っている。1948年政府は戒厳令を發布し白色テロの圧制を加え、我がタイヤル民族の主権行使を妨げてきた。「台湾省山地保留地管理規則(辦法)」は日本占拠時期に村落移住計画の実施のために整備された高砂族所要地約24万haのみをその範囲とし、その他の約130万haの広大な領地は、日本政府が我がタイヤル民族の土地を盗んだ騙しのテクニックが再度模倣され、国有化されてしまったのである。

\*

上に明らかなように、タイヤル民族議会の主張は中華民国内部での自治政府を承認させ、伝統的な土地を民族自治政府の手に取り戻すことにある。外来政權により抑圧され、民族的権利を傷つけられてきたタイヤルは、その歴史認識を伴いながら今立ち上がろうとしている。タイヤル民族の歴史が表明されることと、民族主体が登場することは同時の出来事である。

### 3.2 ガオジン スーメイ 高金素梅国会議員による反帝国主義史

タイヤル民族議会と距離をとりつつ、同じく植民されてきた過去からの脱却と自治を主張しているのが、高金素梅(タイヤル名 吉娃斯・阿麗、1965年生まれ)国会議員である(中国語の正式

名称は〈立法委員〉）。高金素梅氏は母方がタイヤル、父方が外省（「台湾省」外の省という意味）系の出身で、先住民族の身分を近年取得し、日本と中華人民共和国を含めた政治活動を行っている。「日帝」（日本帝国主義）・「米帝」（アメリカ帝国主義）批判を通して、抑圧されてきた台湾先住民族の歴史を「取り返すこと」を主張している（高金素梅 n.d.: 3）。

高金素梅氏の父・金徳培は大陸安徽省出身で、国民党兵士としてベトナムのフーコック島などに派遣されたのち台湾に渡った。子どもは父の姓をとる漢民族の習慣より、高金氏は2000年まで「金素梅」と名乗っていた。家族と周囲の人々の勧めと支持があつて国会議員に立候補する際、母方の先住民族身分を取ることを決心した。母の姓「高」を受け継ぎ「高金素梅」となった彼女は先住民〈<sup>ユンチュン</sup>原住民〉の身分を法的に獲得し、2001年から2008年の現在に至る三期の山地先住民族枠の議員を継続して務めている。同時にタイヤル名で「<sup>チワス アリ</sup>吉娃斯・阿麗」と名乗り始めた。先住民族アイデンティティを自覚したきっかけは、ある一枚の写真を見てからだった（胡2005）。その写真は、日本人らしき人物が台湾先住民らしき人物の首を切り落とす刹那のものであり、彼女の企画編集した写真集（2002）や、『合祀を取り消し、名前を削除せよ！ 我々は日本人ではない』（n.d.）などのパンフレットにしばしば掲載されている。

高金氏は靖国神社による台湾先住民族の祖霊の合祀を取りやめてほしいと主張しているが、神社側に拒絶されている。2003年に小泉元首相の靖国神社参拝を提訴し、大阪高裁2005年9月での、首相の参拝は違憲との判決を引き出した。こうした彼女の活動は、台湾の戦中派の人々の反発を受けている。女性による「出草」（首狩り）宣言と行動（高金素梅HPを参照）は伝統的女性規範の逸脱であると、高齢タイヤル男性が批判するのを筆者は幾度か聞いたことがある。日本による先住民族への初等教育であった「蕃童教育」を「洗脳教育」であったとし、「原住民である自分を誰であるのかさえも忘れさせた」教育であったとする主張（高金素梅 n.d.: 36-7）は、日本教育の中で生きてきた高齢タイヤル男性にとって全面的には同意できないものがあるのだ。

高金氏の動きに関して、日本側では積極的な呼応の動きがある（高橋 2005；中島 2006；丸川 2005）。NDU日本ドキュメンタリストユニオン企画／制作のドキュメンタリーフィルム『出草之歌：台湾原住民の呐喊・<sup>トウカン</sup>背山一戦』（2005）は、高金氏の政治活動を追ったものである。2005年6月の靖国神社前での反対派日本人、警察との小競り合い、神社側との押し問答を映し出している（丸川 2006を参照）。同時に、日本人の戦中派世代を中心メンバーに持つ「あけぼの会」（後述）は、高金氏らの靖国訴訟に反対の姿勢を採っている。

### 3.3 原藤太郎（トフイ・ホラ）の記憶

タイヤル民族議会の先に見たような主張が登場した背景として、大会パンフレットの文中にも述べられている日本と中華民国による植民政策と暴力が存在する。ここでタイヤル民族議会マサ・トフイ第二期議長（<sup>ムルフー</sup>1932年生まれ、中国語表記は馬薩・道輝、中国語名は黄栄泉）の父親であるタイヤル人原藤太郎（タイヤル名：トフイ・ホラ）という人物に焦点を当て、マサ・トフイ議長らの

自治を求める運動の背後にあるものを理解したい。それは暴力的な経験の記憶である。

「ムルフー」や「頭目」といった政治的リーダーの位置や性格をどのようなものとして構想するか、特に中華民国政府とのかかわりにおいてどのように構想していくかが、民族自治のあり方として問題になっている<sup>4)</sup>。そうした中でタイヤル民族議会は議長職に対して再びこの「ムルフー」の語を用いており、第二回議長にはマサ・トフイ氏<sup>ムルフー</sup>が選ばれた。マサ・トフイ氏には、2004年から05年の台湾でのフィールドワークにおいて実際にお会いし、以下のようなお話を伺った。マサ・トフイ氏の父・原藤太郎（1897－1939年）は日本統治期に巡査になったが、日本当局が自分の土地を接收しようとしたことに抗議し、昭和14（1939）年12月20日に切腹自殺した（復興郷志編輯委員会 n.d.: 439）。原はその四年前に開催された「高砂族青年団幹部懇談会」（1935年10月29日）に、全島から集められたその他31名の先住民族「先覚者」と共に参加し、植民地政府が期待を寄せる人物の一人だった。父・原藤太郎の自害事件当時、マサ・トフイ氏は7歳前後であった。

\*

父は大正9（1920）年から、試験を受けて警察になり、巡査補を何ヶ月かやりました。昭和14（1939）年に警察を辞めて、青年団長になりました。ある時、自分の土地に測量の旗を見つけました。政府がやるなら、どんなことでも父に相談するはずなのに、これはおかしいと思いました。昭和14年12月20日、角板山の青年団の検閲がありました。州長、警察部長、理蕃課長、警視等がみんな来ます。親父は、うちのお袋に、お前行け、体の都合悪いからと言いました。お袋は朝早く行きました。お袋が角板山の下の坂のところに来た時、青年が何十名降りてきました。「あー奥さん、奥さん」と迎えられた。「原さんのことですが、大変突然のことですが……」「電話がかかってきて、亡くなられたそうです」。

遺言の中には、水田のことについては、確定的な何かはなかったんですけど、心配させるようなことが今後発生しないように、まぎらわしいことをしないでほしいとありました。我々の開発した土地を、政府があたかも地主の意思を問わずに自由に処分すると。私は部落（集落）の人に申し訳ない。妻子のことは面倒見てくれ、とありました。

\*

戦後の政府による半強制的な移住経験について、マサ・トフイ氏はこう語る。

\*

（中華民国政府になってから）<sup>かんくわん</sup> 観音（桃園県の海岸沿いの町）の海岸の土地を与えられました。しかし生活できません。二、三年位して問題が出ました。イタイイタイ病の原因にもなったカドミウムの汚染で、せっかく作った稲にカドミウムが浸透して、食えないし売れない。カドミウムは国家の重要な工業でした。田んぼを探しなさいと、政府から38万円くらいもらいました。政府がまとめて土地を買い取るのが本当でしょう。田んぼを探し当てた人はいいが、みな散り散りばらばらになりました。（括弧内は中村による補足）

\*

民族議会を推し進める運動の背後には、上のような日本と中華民国による植民状況における暴

4) 原住民族テレビ元気ニュース（原住民族電視台原視元気報）2007年7月18日版。2007年7月現在、楊仁福<sup>ようじんふく</sup>立法委員が立案した「原住民族部落、頭目文化傳承保存法草案」と、行政院原住民族委員會の草案「原住民族傳統領袖制度維持保護法」が存在する。



力の記憶が離れがたく存在している。語の意味内容は未確定であるが「民族自治」という語は、マサ・トフイ氏そして原藤太郎にとってのタイヤルの夢であり続けてきた。父についての記憶は必ずしも系統だっていない断片的なものであるが、日本人である筆者の登場により喚起され日本語で語られる。タイヤル語と中国語で書かれた民族議会のパンフレットのトーンとは異なり、日本語で私に語ってくれた内容は、日本の侵略を直接に批判しないトーンで語られる。

マサ・トフイ氏が感じている事態は、暴力の予感なのかもしれない。日本人である私が日本語で植民地時代の過去について話を聞くことが、暴力の記憶の想起の引き金になっている。マサ・トフイ氏は日本軍警により徹底的に暴力を行使され「鎮圧」されてきたタイヤルたちの、明確な言葉にしがたいトラウマ的な過去、そして抗議の意味を込めた父の切腹自殺の暴力を感じている。日本人を「逆ギレ」させてはならないという身構えが、無意識に採られているようだ（野村2005を参照）。マサ・トフイ氏にいろいろお話を聞かせてもらって数年になるが、私は、そして日本は言葉によって厳しく非難されることはない。

植民地政府の「討伐」を受けその圧倒的な軍事力の中、タイヤルの生活は統制を受けていた<sup>5)</sup>。そうした状況下「人質」同然に教育を受けさせられた原藤太郎は、「同族」の人々に「嫌われ」（『理蕃の友』1935年11月号における原自身の言葉）ながらも、植民地政策遂行の仲介役として生きた。原は植民政策の進める日本的近代化に乗らされ自ら乗ろうとし、その道半ばで絶望し死を選んだのだ。原藤太郎の息子であるマサ・トフイ氏は、父の夢を想像し自分なりに受け継ぎ、それが現在のタイヤル民族議会の進める運動への動力の一つになっている。

さて、民族議会や高金素梅氏の運動は、私がフィールドワークを行っている復興郷の高地（「後山」）のタイヤルの人々の間ではどのように受け止められているだろうか。筆者が聞き書きを行っていた2005年までのエヘン集落において、民族議会に積極的に関わっている者はほとんどいないようだった。筆者が民族議会の大会に参加しに行くと述べても、民族自治がタイヤル民族の権利のために努力しているのだとおそらくは考えながらも、「今は桃の収穫の仕事が忙しいから……（参加することはできない）」というような反応があった。子どもを平地の学校に送り、その面倒を見なければならない親たちにとって、山地での農作業をしていくだけで生活は大変忙しい。

高金素梅氏については、彼女が指揮をとるデモに参加することはあっても、全面的に賛同しているという訳でもないようだ。国会議員選挙のための「政治的パフォーマンス」の側面を指摘する人もいた。こうした意味で、高金素梅国会議員やタイヤル民族議会といった中央と地方のタイヤルエリートと、高地のタイヤルの人々の間には温度差が存在すると同時に、機あらば足並みをそろえる力のベクトルがある。未来への夢への様々な動力が、錯綜した状態にある。

5) 塩と鉄砲の管理など、日本植民地政府による先住民族に対する経済生活統制については中村（2003）を参照。

## 4. 日本人である私がどう聞くのか

### 4.1 漢人研究者との間に交わされる暴力の記憶

これまで記述してきたフィールドワークでの聞き書きは、私という日本人が行なったものである。聞き手が日本人であることの限界を克服する努力を、ここでより深めたい。

ウマオ氏の家に居候してまもなく、ウマオ氏の妻のお母さん・ピスイさんとお会いした。日本教育を受けた方で、私のことを日本人がよく来たと歓待してくれた。大切にしまってあった蜂漬けのお酒を取り出させてきて、一緒に飲む。日本時代、警手（下級警察官）だった今は亡き夫のことを話してくれる。台北に戻り数ヶ月して、ピスイさんから電話がかかってきた。電話でおしゃべりしているうちに、日本時代に習った歌を歌ってくれ、そのうちに、感極まって涙を流していらっしやった。私は、自分が特に何もお願いした訳でもないのにピスイさんがそのような反応をすることに、ただ戸惑っていた。私が日本に一時帰国すると言うと、ピスイさんは「日本の人々に、山の人は感謝しておりますよと伝えてください」というようなことをおっしゃった。

この話に見られるように、調査者が私という日本人であることは、台湾先住民族が日本植民統治の記憶や経験を語る行為や感情に対して、明らかに影響を及ぼしている。日本人の存在は日本統治の記憶を喚起するのだ。そして上のような語りを「親日台湾」イメージとして回収する力が、現代日本に登場している（五十嵐 2006を参照）。「親日台湾」というレッテルを台湾とその住人に貼ることにより、トラウマ的な記憶の到来の問題がこぼれ落ちてしまうことに注意を払う必要がある。実は、日本人の介在しない場においても、暴力の記憶の到来は語られている。

陳茂泰編、吳玉珠・陳勝榮共同研究の『台北県ウライ郷タイヤル民族高齢者のオーラルヒストリー集』（2001年、板橋：台北県政府文化局）からは、日本人が介在しない場でのタイヤルの人々の語りを読むことができる。陳茂泰氏は漢人でタイヤルの研究に携わる中央研究院民族学研究所の副研究員であり、陳勝榮氏はタイヤル人であり通訳を務めた。インタビューは主に中国語とタイヤル語で行われた。

編者により「日本の観光客がウライで何か言っても何も信用しません」という表題がつけられたヤユツさん（2000年時77歳女性）の話は、日本（統治とその責任）について批判的に言及している（登場人物は仮名とした）。ヤユツさんは22歳で結婚し、その後、夫のアロックさんが日本のために南洋に戦争に行った。アロックさんは戦場で亡くなり、ヤユツさんは同じく高砂義勇隊員として戦場から帰ってきた同郷のトルさんと戦後再婚した<sup>6)</sup>。ヤユツさんは「夫が行った時、23歳でした。私は24歳。ちょっと辛かったけど、国家の任務のために行きました」と言う。軍事貯金、戦時補償に関して以下のように述べる。

\*

ヤユツ：日本は、義勇隊の人々が南洋でどのくらい貯金があったかを調べましたよ。アロックの貯金がい

6) 「高砂義勇隊」とは、日本植民政府により、1942年頃からおよそ8回にわたりフィリピンからバブアニューギニアなどの戦闘地域に動員された台湾先住民族を指し、その数は少なくとも8,000名と考えられている（Huang 2001）。

らあったか通知しました。だけど私たちは受け取りませんでした。騙されているかもしれないです。それにあんなに少なくて。最近になってようやく調べ始めてね。(中略) たくさんの日本人が観光に来ている(補償金の問題を解決してあげると)言うけれど、私は、あの人たちがおっしゃることを信用していませんよ。あの人たちは、「大丈夫、通帳があるなら私たちがやる」って言うけど、その後何も送ってきません。(中略) 日本の交流協会が調査して、(中略) 貯金を確認しに行きましたけれど、ほとんどなくて、要らないって言いました。自分の父が南洋に三回も行って帰ってきて、手柄も立てたのに、あんなにちょっとではね。(括弧内は中村による補足)

\*

日本の大使館に相当する交流協会による弔慰金は、ヤユツツさんを癒しはしなかった。ヤユツツさんはその弔慰金の受け取りを拒否しているのだ。次は、ヤユツツさんとアロックさんの間の息子・ノミンさんがフィリピンに行った時の話である。

\*

ヤユツツ：ノミンが二歳の時、お父さんが戦争に行きました。私はノミンに言いましたよ、父さんはこういう人だったと。

その場にいた別の人・アイコン：A 会社が職員の慰労旅行をして、ノミンもA 会社だったからフィリピンに行つて、戦争した所にも行ったんです。たくさんの十字架があつて、ノミンはそれを見てひざまずいて、父さん！って叫んで泣いていました。ガイドさんがここは台湾兵がたくさん死んだ所ですと説明したので、ノミンは父さんのことを思い出したんでしょう。ひざまずいて、自分はもう台湾に戻らないと。(中略)

質問者：ノミンは父さんの写真を見たことがあるんですか？

ヤユツツ：私ら先住民は、写真なんてありませんよ。日本人はありますよね。ところで、あなた方は何の目的で私たちのところに来ているんですか？(陳茂泰(編) 2001: 43-9)。

\*

この後、同行者が訪問の目的を説明したと同書にはあるが、質問者はすぐにまた別の話題に話を振っている。日本統治時代の高砂義勇隊員への補償についてと同様に、戦後の日本人に対しての「親日」イメージとは程遠い、辛らつな評価がそこにある。おそらくヤユツツさんは日本人に対して、上に述べたことを決して直接にはおっしゃらないに違いない。そして、日本人読者がこの話を今読んでしまった以上、この話を聞かなかったことにすることは既に出来ないはずだ。

ヤユツツさんの息子であるノミンさんがフィリピンまで行き、戦死した父に出会い直す。そのことまで話が進んだ時、「あなた方は何の目的で私たちのところに来ているんですか？」という発話がヤユツツさんからなされる。トラウマ的な記憶を、癒しのないままに蘇らせてしまう、直入かつ暴力的な質問に対する違和感の表明であろう。戦死した夫は、一体誰のために、何のために戦つて死んだのか。植民統治当時なら「お国のため」「天皇陛下のため」という答えが用意されていたろう。しかし日本の敗戦と台湾からの撤退を経てからの60年間、その問いに誰も答えてくれない現実をヤユツツさんらは生きてきた。

ヤユツツさんの前夫と後夫は共に、日本のために南洋に戦争に行った。それは心から志願したかもしれないし、「国の任務」のための半ば強制的なものであったかもしれない。帝国日本の

「大東亜共栄圏」の夢が台湾先住民族に押し付けられた。台湾先住民族の中にも、植民地におけるヒエラルキーからの解放を夢見て、その夢に人生をかける人々もいた（Huang 2001を参照）。しかしヤユツツさんが当時見ようとした夢は、冷戦体制により大きく規定されてきた戦後の長い時間が碎いてしまった<sup>7)</sup>。一義的には日本政府がその責任を取るべきなのであり、二義的にはそうした日本政府を選んでいる日本国民が責任を取らなければならない。同時に本稿は、本稿のような民族誌記述がヤユツツさんたちの思いを伝え、伝えられた人がそれをさらに別の人に伝達したり、心の中に大事にしまっておくことから、責任のとり方が始まると主張する。

#### 4.2 戦中派日本人団体、「あけぼの会」の夢

日本人による台湾先住民族への戦争責任の取り方を考える上で看過し得ない動きが、戦中派日本人を中心とする団体「あけぼの会」の活動である。その活動は帝国日本に対する懷古と共に、「高砂族」における日本精神を再発見し、それを日本人アイデンティティの回復へと結び付けようとする。主宰する門脇朝秀氏は1914年植民地朝鮮生まれで、2006年93歳。大阪外国語学校支那語部で中国語を専攻し、歩兵七九聯隊で兵役を終えたのち、南満洲鉄道会社勤務。旧陸軍情報将校・特務を務めたという<sup>8)</sup>。終戦時は大連で居留民の帰国作業にあたる。同様の体験を持つ大陸帰還者を主体に、1953年ころに、門脇氏が主宰して「あけぼの会」が組織される。会員500余名という（門脇（編）1994：序）<sup>9)</sup>。

1990年代より継続している台湾への旅と交流の背景には、「韓国、旧満州、蒙古、中国全体に散らばる友人たちとの結び付きは、大きな時代の波にかき消されて、今はその痕跡も残っていない」という個人史がある（門脇（編）1999：38）。求めようと夢見る「日本」は、以下のように「高砂族」に見出される。

「口を開けば自分の国と民族をまるで他人事のように批判する人間が、日本国中を占領してしまった感もある。（中略）「歌を忘れたカナリア」の節を聞きながら、戦後五十数年、しかも台湾の一番山奥に今いることも忘れ、ここは日本、周囲の人たちはわれわれと同じ本来の日本人だという錯覚に襲われた。（中略）そこには素朴な感激が満ちている。日本では姿を消した昔の日本の好きが、今も生きつづけている」（門脇（編）1999：384-5）。

屏東県では、第五回高砂義勇隊参加の平山勇（民族名：イリシレガイ）氏に会い、「大東

7) 戦争補償に関して、日本と中華民国政府の公式見解は1952年の日華平和条約により解決済みとしてきた（ただし当該条約は1972年の国交断交により廃止された）。ヤユツツさんの夫を含め、戦争に動員された台湾人は、戦傷病者戦没者遺族等援護法（1952年）、恩給法改正法（1953年）の対象にされて然るべきであったが、日本国籍のみを対象とする「国籍条項」によりその対象外とされた。台湾人は、日本国内居住者を含め、1952年発効のサンフランシスコ講和条約により日本国籍を剥奪されたからである。なお、議員立法である1987年の「台湾住民である戦没者遺族等に対する弔慰金等に関する法律」と1988年の「特定弔慰金等の支給の実施に関する法律」により、台湾人被戦争動員者と遺族に補償がなされたが、ヤユツツさんのように受取りを拒否する者も多いと言われている（高木 2001、各種ホームページを参照）。

8) <http://onseian.seesaa.net/archives/200506.html>、音静庵（離れ）ウェブサイトより（2008年5月3日確認）。門脇氏は「日本李登輝友の会」理事も務めているということである。

9) あけぼの会には、漢民族系台湾人や、日本人と先住民族との間に生まれた方も関わっている（門脇（編）1999）。

「大東亜戦争従軍記章」と「菊のご紋章」の入った金盃を平山氏に授与し、従軍の活躍の「表彰」を行う。平山氏は軍帽をかぶり、身を正して敬礼し受け取る（門脇（編）1999冒頭の写真参照）。平山氏は村人にその金盃を見せて、「これは天皇陛下からいただいた」とパイワン語で説明する（門脇（編）1999: 98-116; 2000: 192）。南澳郷公所主催の歓迎座談会では、日本教育世代の下世代により、戦時補償についてあけぼの会の協力を求めるという訴えがあったが、会としてはそうした訴えには応えない。森副団長はこの件について、「南澳はガッカリした」と述べている（門脇（編）1999: 352）。

2000年4月には10名の元高砂義勇隊員を中心とする人々を、東京から九州に案内した。明治神宮と靖国神社に参拝し、偕行社（軍人団体の元締め）主催のお茶会では三笠宮（崇仁親王、昭和天皇の弟）が参加し、義勇隊員らと交流した。この旅行について載せられている元義勇隊員の声は、「自分で志願したので戦後補償は要らない」（「ピューマ族」の「岡田さん」）、「高砂族は今でも日本人としての気持ちは強く、祭りに行きますと、時に「天皇陛下万歳」を叫ぶことがあります」（「パイワン族」の「平山さん」）というものである（門脇（編）2000: 51-2）。

門脇氏を代表とするあけぼの会は現代日本に喪失感を感じ、その代替を台湾で発見した「高砂族」に求めようとする。「外地」で生まれ、帝国の暴力の最前線で日本人であることをおそらく日々意識せざるを得ず、戦後日本が敗戦前を悪として切り捨て思考してこなかったことに対する門脇氏のやるせなさや孤独感は、1990年代に「高砂族」と出会ってから、彼らにその癒しを求めていくという行為に変質したのである。南澳の人々からの戦時補償を求める声の切り捨てられてしまったように、聞きたい声のみにすり寄っていく傾向があると言える。あけぼの会の交流は、日本人が旧植民地人の声を現在聞こうとする際の一つの典型を示している。

### 4.3 日本によるユートピア建設の挫折と、天皇制に関わるその責任の取り方

植民地下「蕃地」において、圧倒的な軍事力を背景に警察と頭目による支配が作られていった。戦時動員体制は、天皇の権威と警察権力の浸透により力を発揮し、多くの動員を果たしていった。植民地の支配体制はイデオロギー的にも現実にも、天皇を家長とする家族国家観的「大日本帝国」であった（伊藤 1982; 上野 1994）。台湾山地においては、「恵與」を手段とする「恩」と「威」併行の皇民化経済政策が実行された（中村 2003）。イエのメタファーと、「赤子」と子どものレトリックは、台湾先住民族に対して際立って機能していた（山路 2004）。タイヤルの多くの高砂義勇隊員たちが日本について言及する際、天皇は「日本のムルフー」（mrhuu na zipun）という表現をよく用いるように、天皇は彼らにとり未だ記憶され続けている存在である（中村 2003b）。上述してきたように、タイヤルにとってムルフーのあり方が、民族自治と関わって現在模索されている。

あけぼの会の活動は、高砂義勇隊員達に「大東亜戦争従軍記章」と「菊のご紋章」の入



た金盃を恵与し、皇族に謁見させるという行為を通して、かれらに多くの記憶の到来を生じせしめただろう。「パイワン族」の「平山さん」にとって、「天皇」は今も共に生き続ける重要な存在である。「戦後」50年から60年を経て「平山さん」が叫ぶ「天皇陛下万歳」は、日本国籍を持つ日本人による同じ内容の発話とは行為遂行性（performativity）において異質であり、それは天皇の植民統治・戦争責任を追及する高金素梅氏の運動と表裏一体である。そこでは、記憶が到来する中で、継続する「帝国」の「綻び」がかすかに生成している（富山 2000）。

あけぼの会の運動は「平山さん」と同じくユートピアを希求しつつも、本稿に描写した先住民族が自らの暴力的な過去に向き合っているという事態とは明らかな異なりを見せている。門脇氏自身に、暴力を含め中国で何を行ってきたのかを明らかにすることにより、自己とは何者かを問うていく姿勢がないように見えるからである。ノスタルジックな日本を先験的に設定し、それを先住民族の織りなす言動に投影し、植民統治以来の文化装置により日本人と先住民族の関係性を維持しようとしている<sup>10)</sup>。

私はあけぼの会の活動とその記録から、暴力の記憶が分有されている印象を受けることができない。むしろ、植民統治以来の秩序に、台湾先住民族のもつ暴力の記憶が資源として回収されている感を受けるのだ。それは、あけぼの会の人々の既存の主体が動揺することなく、自らを肥やす形で台湾先住民族の記憶を消費しているからであろう。暴力の記憶の分有は、既存の主体が動揺する中で生じる事態であると考えている<sup>11)</sup>。

困難な問題は、義勇隊員達、そして先に見たヤユツツさんら遺族の人々の癒しが、どのように「記憶の到来／帝国の綻び」に結びつくのかということである。ヤユツツさんが「あなた方は何の目的で私たちのところに来ているんですか？」と調査者に問いかけ、トラウマ的な記憶の暴力的回帰に終止符を打ったように、癒しの場が創造できないまま記憶を語ることは苦痛にしかならない。その意味では、金杯を恵与され皇族に謁見した義勇隊員達は帝国へのノスタルジーと帝国復活の願望というコンテキストの中にあっても、一時は癒されたと言える面があったことに注意する必要がある。

先の戦争と、さらに台湾の植民地化に遡り、生きのびた者の苦労と暴力の経験、死んでいった人たちの声を、残された者たちはいかに聞くことができるだろうか。そして残された者のうち特に日本人は、植民統治責任と戦争・戦後責任を負う中でこの問題を思考していかなければならない。日本人に直接語られる植民地の記憶を、反植民地主義や反帝国主義としてのみ聞くことは、そうした権力関係の中で近代化に努力してきた人々の思いを否定しきることになろう。あるいは逆にそれらの記憶を、日本人の誇りやノスタルジーを回復させるものとして切り取って聞くことは、その背後の暴力の出来事と経験を聞き落とすことになろう。タイヤルや台湾先住各民族の人々の日本についての様々な語りにまず耳を澄ますこと、問題はそこから始まる。それがタイヤル民族の根源的

10) 植民統治以来の「部族と接触」という表現（門脇（編）1999: 67）、また「父の国日本」（門脇（編）1999: 304, 341）という表現が用いられ、「子ども」としての「高砂族」というメタファー（山路 2004）が反復使用される。

11) 本段落の思考は橋本恭子氏との議論において示唆を得た。

自治のあり方に結びついているのであり、日本人が植民統治の歴史を克服し、植民統治の責任を負うことにつながっていくのである。

植民統治責任は同時に、過去「家長」であり「大元帥」であった天皇がかれらの経験を現在聞き、直接向き合い、ねぎらいの言葉をかける事態を排除しない。それは、植民統治以来の文化装置を単に反復することではなく、天皇制の内側からそれを瓦解し作り替えていく契機となろう。そうした内側からの変革の可能性を、栗原彬は天皇制の「内破」と称している(栗原 2002)。それは天皇自らの過去が問い直され、自らの行いを言葉で説明する責を全うすることにつながるはずである。「共栄圏」のユートピア建設の挫折とその責任の取り方の問題が、天皇制という日本が創ってきた文化に関わっている。以上に示したような植民の暴力の記憶についての民族誌が書かれ、読まれることは、人々の記憶に耳を澄ますことと、暴力的経験を癒す場の創造の一つの重要な契機となろう。

## 5. 暴力の記憶が分有される中で植民統治責任を取っていく民族誌

私の研究と探求は訪台の当初、「日本人として」日本の過去にいかに向き合うのかという極めてナショナルな問題意識から出発していた。それが台湾先住民族との交流において、特に暴力的な経験を聞き書きし自分が知覚していく中で、植民統治の影響や遺産を、今語ろうとする場、あるいははっきりと語ることができないが語られるような場に、記憶として到来するものであると認識するようになった。トラウマ的なものを含んだこれらの記憶は、「日本人として」のみ聞き取り可能なものではない。個々の記憶は民族史を形成する要素になると同時に、民族的主体の固い殻を溶解し、崩していくものとなりうる。

台湾先住民族と植民主義についての研究においては、植民支配の構造あるいは暴力と、民族主体性の関係が焦点となっていると考えられる(中村 2003b)。本稿を通して私はウマオ氏の発言を、暴力的な過去をすぐさま肯定あるいは否定するのではない、未来を模索していく力を持ったものとして聞くようになった。日本に統治されていた「あの頃の自分たちはよく人の話を聞いた」、だから未来は「自分たちで自分たちのことを決めていく」という、脱植民＝自治の運動と共に開かれていく。

武力抵抗が何度も潰され、国家によるテロルの下で生きてきたタイヤル人の主体性を物理的抵抗のみに見出すことは、より強大な物理的力によって再び簡単に鎮圧されることに終わろう。帝国日本と中華民国に関わらず、その資本主義的近代化を全否定するのではなく、資本主義的近代化に既に影響を受け、それを志向し欲望する自分自身を俎上にあげ冷静に見つめることが必要である。その現実を生きてしまっている者たちは、この現実を否定しきらず肯定しきらない語りしかできず、抵抗か同化かという二分法では表現しきれない事態を語らんとする場にこそ主体性が登場する。

植民主義が形作ってきた現存秩序に確定されない動力の噴出としての暴力の記憶は、ウマオ氏の「あの頃の自分たちはよく話を聞いた」というつぶやきや、マサ・トフィ氏の民族自治運動の追求と共に到来する。ここで主体性は記憶、特に暴力の記憶の到来と共に形作られていると言えよう。その主語は決してタイヤルだけのものではありません、暴力の記憶の到来を感知してしまった者たちのものでもあるのだ。主義主張が結ぶ連帯というよりも、暴力の記憶を感知する者たちのかすかなつながりが、生じているはずである。

未来への夢は民族議会や高金素梅氏、エヘン集落の人々に見たようにタイヤル民族にあっても単一ではなく、錯綜したものである。『台北県ウライ郷タイヤル民族高齢者のオーラルヒストリー集』のヤユツツさんの思い、戦場で亡くなったその夫たちの夢が重なる。それらの輻輳した動きが、新しい未来を開く暴力の記憶という主題において接合される。戦中派日本人を中心とする団体あけぼの会の心情と活動は、自らの暴力の記憶にふたをする形をとって帝国日本の夢を引き継いでいる。複数の夢は錯綜した状態にあるが、暴力の記憶を癒すという点に問題の核心を見抜くことで<sup>12)</sup>、その記憶の分有がつかずかすかな「私たち」が民族誌記述を取り巻く（書き、読まれる）場において現前するだろう。

帝国日本の歴史を持つ日本人が何をしてきたのかと問う植民統治責任は、家族国家の家長、最高責任者だった天皇の責任を明らかにしていくこと同時に、植民の暴力の記憶が日本人一人一人に分有されつつ取られてゆくものである。植民者にとっても被植民者にとっても、植民（地）経験が何であったのかを追究することと、責任を取るということが重なる、二重の行為遂行性という事態が植民暴力の記憶の記述とそれが読まれる場において起こっている。

板垣竜太（2005）は、韓国における「親日派」の清算問題が、日本の植民地支配責任をはっきりと問うことなく進行している現状を、まずもって日本人に向けて問題化している。日本植民主義は、「絶えず自らと差異化されるべき「他者」の存在を要求し、そのことによって形成されるナショナルな枠に閉じこもりながら、なおかつその枠を延長していこうという運動」であったから、その責任追及の運動もトランスナショナルなものとなる。その運動の根拠となるのは、植民地支配によってもたらされた「被害の経験という痕跡」である（板垣 2005: 312-3）。歴史的経緯は異なるが、台湾における日本植民統治責任問題の枠組みも、基本的に板垣の言うものが当てはまる。本稿はその議論を踏まえつつ更に、語られる記憶から暴力の経験を分有し、分有されてしまうところから植民の責任が取られ、脱植民的な新しい未来が開かれるべきことを述べてきた。

到来する暴力の記憶が切り開く状況は、植民主義に席卷されてきた人と人の分断、あるいは人類学が過去に行ってきた「族」や「民族」の分類を、別の形で節合（分節）し直すだろう。本稿では暴力の記憶という動力が切り開こうとする未来（への動き）を、新しく生成する「私たち」のつながり方として思考してきた。語られる記憶や歴史を聞き、読む人々がつながることで生まれる「私たち」が、日本植民統治責任をナショナルではない形で取るのだ。そのつながり方はナ

12) ここで癒しとは、亡くなった者の生を語りあい、追悼することと考えている。生者の癒しは、その人の悲しみや苦しみに感じ入り込むことであり、それは自発的理性的に行われるものというよりは、自然発生的に行われるものであろう。

ショナルな想像に基盤を置いたものではなく、むしろ記憶や語り、言葉の連鎖が換喩的につながり方であろう。そのつながりは、タイヤルと日本人にとどまるものではなく、「台湾人」や「中国人」、更にはその周囲の人々への、普遍的な広がりを持つものである。

## ◀ 参考文献 ▶

- 五十嵐真子(2006)「はじめに」『戦後台湾におけるく日本>——植民地経験の連続・変貌・利用』五十嵐真子、三尾裕子(編)、1-11頁、風響社
- 石垣直(2007)「現代台湾の多文化主義と先住権の行方——〈原住民族〉による土地をめぐる権利回復運動の事例から」『日本台湾学会報』9: 197-216
- 磯田和秀(2006)「ユートピアの忘れ得なさ:ある老人の独立インドをめぐる記憶／想起から」『ポスト・ユートピアの民族誌:トランスナショナリティ研究5』、大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」田沼幸子(編)、21-30頁、同プログラム
- 板垣竜太(2005)「植民地支配責任を定立するために」『継続する植民地主義——ジェンダー／民族／人種／階級』、岩崎稔、大川正彦、中野敏男、李孝徳(編)、294-315頁、青弓社
- 伊藤幹治(1982)『家族国家観の人類学』ミネルヴァ書房
- 上野千鶴子(1994)『近代家族の成立と終焉』岩波書店
- 岡真理(2000)『記憶／物語』岩波書店
- 笠原政治(2004)「台湾の民主化と先住民族」『文化人類学研究』5: 31-48
- 春日直樹(2006)「編集後記」『文化人類学』71(3): 435-436
- 門脇朝秀(あけぼの会)(編)(1994)『台湾高砂義勇隊:その心には今もなお日本が(祖国はるか5)』あけぼの会
- (1999)『台湾の山地に旧高砂族を尋ねて(祖国はるか9)』あけぼの会
- (2000)『台湾から心の友を迎えて:高砂義勇隊員とその遺族 ビルマ派遣軍従事者たち(祖国はるか10)』あけぼの会
- カルース、キャシー(2000)「過去の入手不可能性と可能性」『トラウマへの探求——証言の不可能性と可能性』、キャシー・カルース(編)、下河辺美知子訳、226-236頁、作品社
- 丘延亮(1997a)「準オリエンタリズムおよび準帝国主義者の実情——先住民言説と、国家-国民像の貧困」(上・中・下)『インパクション』喜田登志ケイラ由美子訳、102:182-200, 103:186-203, 104:139-152
- (1997b)「日本植民地人類学『台湾研究』的重読と再評価」(日本植民地人類学の「台湾研究」に対する再読と再評価)『台湾社会研究季刊』28:145-174(中国語)
- 栗原彬(2002)「現代天皇制論——日常意識の中の天皇制」『岩波講座 天皇と王権を考える1 人類社会の中の天皇と王権』網野善彦他(編)、129-161頁、岩波書店
- 高金素梅・祖靈之邦・台湾原住民族部落工作隊HP「祖靈之邦」(祖靈の国) <http://www.abohome.org.tw/>
- (n.d.)「合祀除名・我們不是日本人:合祀を取り消し、名前を削除せよ! 我々は日本人ではない:합사 제명! 우리는 일본인이 아니다。」高金素梅発行
- 高金素梅企画、徐宗懋・張群智著(2002)『無言的幽谷』(無言の幽谷)新店:正中書局(中国語)
- 胡忠信(2005)『你願意聽我的聲音嗎(あなたは私の声を聞こうとしますか)』:胡忠信、高金素梅対談録 台北:智庫(中国語)
- 小林岳二(2001)「マイノリティをうみだす囲み——台湾先住民族の保留地「蕃地」(番地)の変遷とその機能」『学習院史学』39: 19-35
- 酒井直樹(1997)「多言語主義と多数性——同時的な共同性をめざして」『多言語主義とは何か』三浦信孝(編)、228-245頁、藤原書店
- 下河辺美知子(2006)『トラウマの声を聞く——共同体の記憶と歴史の未来』みすず
- 謝世忠(1987)『認同的汚名:台湾原住民族的群変遷』(アイデンティティのスティグマ:台湾先住民族のエスニックグループ変遷)台北:自立晚報(中国語)
- 徐勝(編)(2004)『東アジアの冷戦と国家テロリズム』御茶の水書房
- 高木健一(2001)『今なぜ戦後補償か』講談社
- 高橋哲哉(2005)『靖国問題』筑摩書房
- 富山一郎(2000)「記憶の到来／帝国の綻び」『IMPACTION インパクション』120: 34-39

- \_\_\_\_\_(2001)『植民地主義と人類学——新たな記述の可能性を求めて』『週刊読書人』4月27日
- 中島光孝(2006)『還我祖靈——台湾原住民族と靖国神社』白澤社
- 中村平(2003a)『台湾高地・植民地侵略戦争をめぐる歴史の解釈——1910年のタイヤル族「ガオガン蕃討伐」は「仲良くする」(sblaq)か』『日本学報』22: 45-67
- \_\_\_\_\_(2003b)『マラホーから頭目へ——台湾タイヤル族エヘン社の日本植民地経験』『日本台湾学会報』5: 65-86
- \_\_\_\_\_(2007)『「困難な私たち」への適行：接触領域における暴力の記憶の民族誌記述』『Contact Zone コンタクト・ゾーン』(京都大学人文科学研究所)1: 143-160
- 中村勝(2003)『台湾高地先住民の歴史人類学——清朝・日帝初期統治政策の研究』緑蔭書房
- 野村浩也(2005)『無意識の植民地主義——日本人の米軍基地と沖縄人』御茶の水書房
- 復興郷志編輯委員会(n.d.)『復興郷志』復興：復興郷公所(中国語)
- 傅琪貽(2006)『台湾原住民族における植民地化と脱植民地化』倉沢愛子、杉原達、成田龍一、テッサ・モーリス・スズキ、油井大三郎、吉田裕編『岩波講座アジア・太平洋戦争4 帝国の戦争経験』東京：岩波書店、267-291頁
- 丸川哲史(2005)『靖国神社で歌われなかった歌は：台湾原住民訪日団「返せ！我が祖霊」行動の一日』『現代思想』33(9): 76-81
- \_\_\_\_\_(2006)『「出草之歌」と「日本の影」を見る眼差し(映画評)』『未来』478: 30-33、7月号
- 宮地尚子(2007)『環状島＝トラウマの地政学』みすず
- 山路勝彦(2004)『台湾の植民地統治：＜無主の野蛮人＞という言説の展開』日本図書センター
- 若林正丈(2007)『現代台湾のもう一つの脱植民地化——原住民族運動と多文化主義』『台湾原住民研究』11: 13-54
- Chiu, Fred Y. L.(1994) Some Observations of Social Discourse Regarding Taiwan's 'Primordial Inhabitants.' In *Unbound Taiwan: Closeups from a Distance*. Marshall Johnson and Fred Y. L. Chiu ed. pp. 133-154. The University of Chicago.
- \_\_\_\_\_(2000) Suborientalism and the Subimperialist Predicament: Aboriginal Discourse and the Poverty of State-Nation Imagery. *Positions: eastasia cultures critique*. 8(1): 101-149.
- Huang, Chih-huei
- \_\_\_\_\_(2001) The Yamatodamashi of the Takasago Volunteers of Taiwan: A Reading of the Post-colonial Situation. In *Japan Outside Japan*. Harumi Befu and Sylvie Guichard-Anguis eds., Routledge. 222-250.

- 투 고 : 2008. 8. 31
- 심사 : 2008. 9. 6
- 심사완료 : 2008. 10. 11